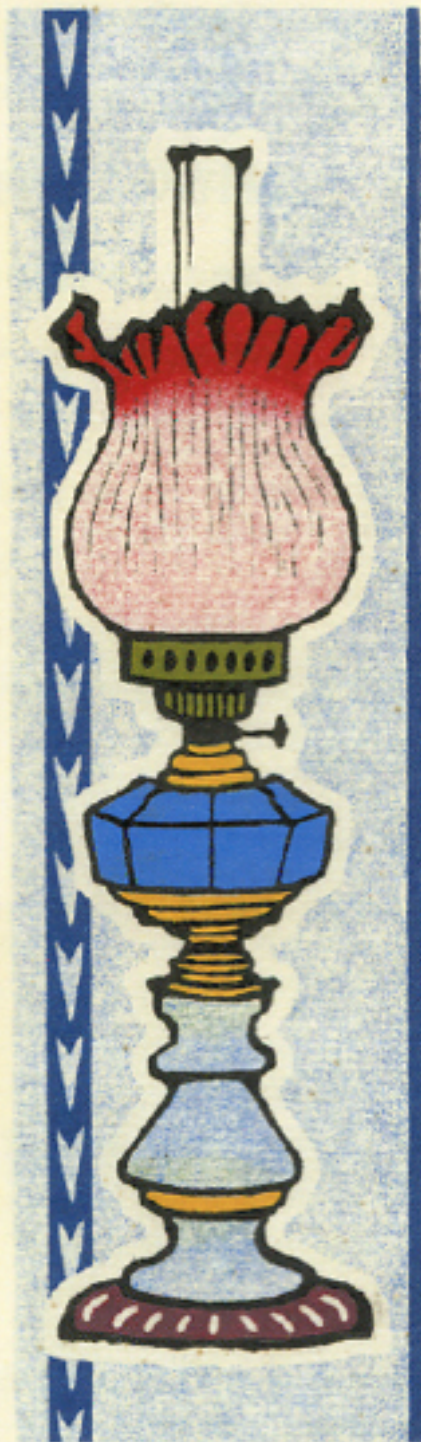


春燈

8 月号

August 2010



主宰の句

安立公彦

晶子忌や碑文に残る自由の香

多佳子忌や潮目縞なす沖つ波

廃線の錆うつくしや虎が雨

窯変の磁器の紋様夏つばめ

読まぬ書の嵩や風鈴連れ鳴りて



久保田万太郎の句

何もかもあつけらかんと西日中

『これやこの』昭和二十年

掲句の「あつけらかん」がいきなり目に止まった。前書に「終戦」とあり、炎暑の中玉音放送を聞いた事を思い出す。女学生だった私は呆然自失涙も出なかった。あの日から六十年の月日が過ぎ此の句に出逢う。思えば「何もかもあつけらかん」とはあの日の庶民の心情だった。それを師は的確に直載に表現された。「西日中」に浮かぶ憔悴の人々の背が哀しい。心に残る感慨深い句である。

井上正子

久保田万太郎の句

木の葉髪泣くがいやさにわらひけり

『冬三日月』昭和二十三年

前書に「辰野隆博士より『佛蘭西演劇私観』受贈」とある。ちなみに現代俳句の驍将中村草田男に「木の葉髪文芸ながく欺きぬ」の作品があるが、草田男は大上段に構え真つ向う勝負している。同じインテリ像を表現するのに万太郎師はいともさりげなく、泣くがいやさに笑ったとだけ言っている。簡単な言葉の裏に深い内容が籠もる、それが万太郎俳句の真髄であるのだ。

本 田 保

燈下集



○ 和田幸江

白ぼたん回廊長き暮色かな
郭公や秩父嶺のいま雲脱げる
青葉木菟湯宿の卓の塩羊羹
六月や朝市に立つ紺紵
八十八夜鷄鳴ひとつあがりけり

○ 大室恵美子

弁財天慕ひて鴨の残りけり
行く春やみな髪染めて同期会
青柿や時に気を入れ厨ごと
花菖蒲賞められ過ぎて疲れけり
共にゐてそれぞれメール電波の日

○ 尾野奈津子

○ 深川敏子

聖五月かつては兵の征きし海
白あやめほぐれ夫の忌近づけり
京菓子の葛の涼しき新居かな
をさな児と泣き笑ふ幸天瓜粉
五月雨や丸き膝もつ石狐

白牡丹ひとひらぶつつの散華かな
不器用にががんぼ足掻く人も又
法難の空翔りゆく朱夏の鳶
滴りや岩屋の奥の奥知らず
江戸つ子を自負の男の夏祭

○ 寺村年明

母の日や母の記憶の点と線

渾名しか思ひ出せぬ師更衣

ある朝の薙ぎ倒されし葱坊主

わが墓碑は赤字のままや木の葉木菟

沙羅の花雨意ある風をまとひけり

○ 小嶋恵美

花檮掃かれて誰もぬない堂

黒揚羽源平の世の恋を舞ふ

弁天橋粹な日傘のふりむかず

忘れ潮忍び歩きの蟹小さき

江ノ電の百年先や薄暑光

○ 三宅文子

傘雨忌や江戸の言葉の男佳き（朗読）

葉桜や明智が妻の墓小さし

助六の喧嘩上手や虎が雨

初物の茄子を鳴かせて洗ひけり

追而書この新緑を送ります

○ 太田慶子

弁天橋を女神に会ひに夏の蝶

あこや貝の帆船模型風薫る

朱夏の島鳶に恋をさらはるる

パナマ帽脱ぎ「傘休さん」鐘を撞く

夕若葉誰かに見つめられてゐる

○ 藤原繁子

焦がれ来し礼文島なり薄雪草

明易や北端の地に目覚めぬて

昆布刈り番屋出払ひぬたりけり

薄暑光樺太見むと目を凝らす

甘きかな新玉葱の直火焼

○ 佐橋敏子

黄金週間思はぬ不覚怪我に臥す

母の里の駿河の新茶とどきけり

養老の滝や父母には孝作さず

ビール酌む窓を大きく開きけり

黒南風や特急列車うしろより

○ 中島節子

八犬伝の里の鮑の噛み応へ

桶に盛る海人の料理や手こね鮎

葎切や朝靄深き牛久沼

家苞に陀羅尼助買ふ余花の旅

もてなしに碾いてみせたる麩粉

○ 橋本リエ

送迎車行く先々の諸葛菜

牡丹園人出にひるむ思ひかな

踊り子草荷風好みの風吹いて

リハビリの歩を伸ばす夏帽子かな

鉄線花平らに雨を弾きけり

○ 青柳雅子

昇天祭スカイツリーを仰ぎけり

ハンカチや聖ヴェロニカエンジェルムの象徴

江ノ島とモンサンミッシェル雲の峰

卯の花の匂へば母と歌ひしこと

髪洗ふとき浮かびくる人恋ふ句

○ 木多芙美子

三社祭スカイツリーを囃しけり

雲行きのあやしくなりし蟻の列

人疲れ癒しし茅花流しかな

一切空岩肌すべり落つる滝

卯の花腐し夕刊斜めに読みにけり

○ 西山浅彦

水中花いちにち雲の早きかな

起し絵の色恋あつけなかりけり

これがかの腰越状か若葉風

その名よき小動岬夏の潮

腰越の海の平らに五月尽

○ 小張志げ

泰山木の花の大盃ひかり盛り

白エプロン水仕たのしき五月かな

金婚の夫婦に適ふかすみ草

三面鏡の一面菩薩更衣

神鏡の中の青葉を拝しけり

当月集

安立 公彦選



○ 清水美子

女人高野石楠花色を深めけり

手櫛して人を待ちをり青嵐

マロニエやときめき秘むる夕まぐれ

星一つ眉月にそふ橋涼し

白牡丹闇を揺らして崩れけり

○ 都丸美陽子

繋ぎたる手の幼さや虹仰ぐ

恋知らずあした咲く薔薇切りにけり

別れ来てすぐ書く手紙みどりの夜

水中花弱音は吐かず咲きにけり

かはほりの水の匂ひの夜空かな

○ 宮沢治子

ファックスより手紙うれしく昭和の日

花びらと紛ふ白蝶よぎりけり

一山のかの真白きは遅ざくら

熱き茶と日の丸弁当麦の秋

薔薇幾つ揺らし江ノ電走りけり

○ 永島雅子

釣忍息を整へチャイム押す

友訪ふや島に匂へる花みかん

島人と交はず会釈や桐の花

御馳走はちぬの御膳と伊予言葉

源平を近うす屋島夏鶯

○ 土屋光男

波郷記念館砂町に訪ふ百日紅

目の合ひて少女ほほゑむ今年竹

海見ゆる丘の古刹や濃あぢさゐ

訪ね来し備中高梁鮎の宿

山棟蛇むくろとなりし谷津田かな

春燈の句

安立 公彦選



傘雨忌や生絹光りの隅田川

千葉 神田 恵琳

青薔薇や風騒何時も身に在りて

語部の薄き口唇白団扇

花うつぎ宴のごとく風にかな

憲法記念日ひょうたん島は晴れなりや(悼)

神奈川 石田 康明

定席にひさは在さず薄暑かな(小町「門」)

幕間の珈琲の香ほのと夏衣

鐘声の茂りに溶けて溪の音

さやさやと風に息づく青田かな

茨城 山崎 刀水

夏草に沈みし縄文住居跡

麦秋の車窓に展く母郷かな

梅雨の雲耀歌の山を隠しけり

山法師と言ふ名の新樹今日も晴れ

千葉 金森 涼

淋しければ一人で来いとみづすまし

道の端に清しき著莪や雨上る

夏草に母を待つ子のしやがみゐて

上毛の水をどり入る苗代田

麦の秋赤城去る雲寄する雲

本堂へ軋む回廊竹落葉

埼玉 茂木 なつ

枇杷むくや初産の目のかがやける

校庭の隅の土俵や樟若葉

夏燕カツプル多き蔵の街

けんくわ傷絶えぬ愛猫走り梅雨

ルピナスや風に任せて踏むペダル

紅薔薇を剪るばら色の沓を履き

朝顔の本葉となりぬ一学期

ほととぎす老舗旅館は池の傍

白蓮の館へ逸る麦の秋

宮崎 前原早智子

埼玉 岡本 葉子

余言

安立公彦

目つむれば青春があり桐の花

松橋 利雄

七月号で作者は癌治療の句を出している。幸い手術は成功し、無事退院となったことは喜ばしい限りである。

そういう術後の思い故か、「目つむれば青春があり」は、句を見る私たちにもしみじみと語りかけてくるような、作者の独語である。

しかしその独語は、決して足許を見て咳く言葉ではない。高枝に咲く桐の花を仰ぎながら、過ぎ去った青春を思い、これからの生に思いを致す作者のひとときの感銘である。

清楚なうす紫の桐の花のような句である。

滝音に背を濡らしてもどりけり 三上 程子

滝は時と所を得ると信仰の対象ともなる。そういう滝を歌人は、冬山の青岸渡寺の庭にいでて風にかたむく那智の滝

みゆ 佐藤佐太郎と詠んでいる。

作者の句、「背を濡らして」に、今まで滝と向き合っていたころの緊張と躍動感、さらにそれらからの解放感がみごとに表現されている。

滝はこれまでもさまざま角度から俳句に詠まれた。掲出句はそれらの作品とは視点を異にした句として注目されるだろう。

新樹冷ゆ娘の書架に「癌治療」

長浜 徳三

この「癌治療」をどう解釈するか。娘さんの身にそういう兆候があるのか。或いは知人の病の故か。作者は複雑な思いでその本に見入っていることだろう。

この句、「娘の書架に」その本があつたと、現実の状況のみを述べている。しかし内容は重い。昔は専門書以外は「ガン」と書くのが多かったが、今は「癌」が普通となっている。ただただ平癒を願うばかりだ。

「新樹冷ゆ」の季語が厳しい。

聖五月かつては兵の征きし海

深川 敏子

五月二十九日、燈下会総会が江の島で開かれた。この句はその時の作品である。江の島は相模湾を経て太平洋に接する。その太平洋は、かつての大戦の日々、出征兵士を乗せた船団

